



<報告>自由科目「2019 へのスクラム」のこと

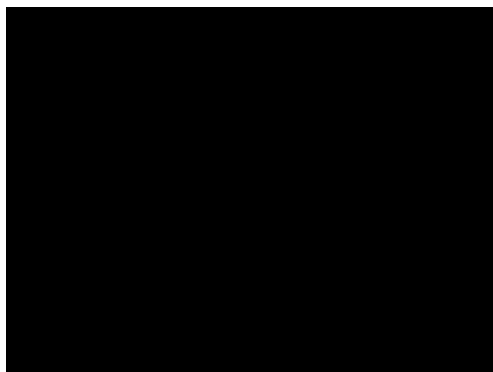
著者	嵯峨 寿, 竹村 雅裕
雑誌名	大学体育研究
巻	42
ページ	75-92
発行年	2020-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00159933

自由科目「2019 へのスクラム」のこと

嵯峨 寿¹⁾, 竹村雅裕¹⁾

Report of Rugby seminar class toward 2019 World Cup in Japan

Hitoshi SAGA¹⁾, Masahiro TAKEMURA¹⁾



スクラムを組むとなぜか笑みがこぼれる

「2019 へのスクラム」は、体育センターが 2013 年度から 19 年度までの 7 カ年にわたり「自由科目」として開講した座学の授業で、およそ 10 回の授業からなる。全学・全学年のラグビー初学者・未経験者をターゲットに、ラグビーのルールや歴史、文化を知ること、ラグビーワールドカップ 2019 日本大会への関心を高め、これからのスポーツライフをより豊かにするヒントを得ようとの目的で行われた。本稿では、「2019 へのスクラム」について、どのようなことを学ぶものか（学習内容）、なぜこの

ような授業を始めるに至ったのか（目的・経緯）、そして、授業を行ってみてどのような気づきがあったのか（自己評価）、以上 3 点を中心に授業者のラグビーに対する関わりや思いなどを交えながら報告する。

キックオフからの勢い

「学生運動でもけしかけるつもりですか？」

授業のキックオフを 2013 年度の秋学期と決め、前年の 11 月頃、新規開講の希望を申し出た。「ラグビー」の文字を前面に押し出しては引か

1) 筑波大学体育系

Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

れてしまう。惹かれるようにと思案を重ね、ようやくたどり着いた「スクラム」がまさかそちの意味に取られるとは思ってもよらなかった。

ラグビーワールドカップ2019の日本開催が決まったのが2009年7月。それから3年も経っていたが認知度のなんと低かったことか。「ブライトンの奇跡」(2015年)が起こるまだ前のことで、ラグビーは今ほど話題にも上らず、世間の注目はむしろ東京オリンピックの招致に向いていたせいもあるだろう。それにしても筑波大学体育系の教員でも知らないラグビーワールドカップは一体どうなるのか。あの時の心配は今となってはまったくの杞憂に終わったわけだが、この授業を通して気運を高めていこうと気合が入った。

しかし、意気込みの割に初年度の受講者は12人。「2019へのスクラム」が扱うのは15人制のいわゆるユニオンラグビーである。スクラムは8人対8人で組む。16人に満たなくては組み合わせない。冷静にみれば、開講当時のラグビー(不)人気を反映した数字と言えなくもないが、力んでいた分拍子抜けした。実は、キックオフに向け、前年の2011年度末(3月)に「大学ラグビー教育研究会」を立ち上げ、大学でラグビー教育に携わる方々を協力者に頼み、シラバスづくりのための会合を重ねていた。2012年度には毎月のように研究会を開き、成果を大体連(公益社団法人全国大学体育連合)が主催する研修会で試行しブラッシュアップを図るなど十分な準備に努めていたのである。

以降、2019年度までの履修者数は表1の通

表1 「2019へのスクラム」履修者数

開講年度	学期	曜・時限	履修者数
2013	秋	金・4	12
2014	秋	金・4	18
2015	春	水・2	1
2016	秋	金・4	20
2017	秋	金・4	21
2018	秋	金・4	84
2019	秋	金・4	67

りで、これを見ると、「ブライトンの奇跡」と呼ばれる、日本が南アフリカから歴史的勝利を上げた2015年ワールドカップの効果はそれほど顕著には伺えない。2019年の日本大会がよいよ翌年に迫った2018年に受講者数がピークを迎えているが、大会開催がようやく視野に入ってきたのがその頃なのだろうか。いずれにしても、スポーツイベントの開催に関連づけた授業を開講するに当たっては、開始時機を見計らうのは難しい。2015年はワールドカップイングランド大会の開催年にもかかわらずたったの1名。それまでは秋学期の金曜4時限に開講していたが、2015年度に限り、大会開幕前に開講するほうが受講者は多いだろうと春学期に変更した。しかも、時間割の関係で開講できる時間がなく水曜2時限となったのであるが、受講者が少なかった原因は特定できない。

各回授業の概要

どのような授業を行ったのか。全10回のうち、初回にはオリエンテーション、最終回はアフター・マッチ・ファンクション(詳しくは後述する)を行い、そのあいだの授業は毎年、更新を図ってきた。シラバスは一応作成するものの、半年以上も前にまだ見ぬ受講者のラグビー経験も関心や動機も知らずにこしらえるため、初回のオリエンテーションでそのあたりの情報を得て修正している。科目名は変わらないとはいえ内容は年によって異なる。全年度分について報告することはできないので、7カ年を振り返り、本科目の趣旨に相応しいとみられる内容を選別し、それらを系統立てて並べてみた(表2)。

10回の授業のうちの前半(②～⑤)は、ラグビーとはどういうルールで行われるゲームであるか、後半(⑥～⑩)は、ゲームをその核としながらも魅力的な広がりを持つラグビー文化へと話題を大きく転ずる。ラグビー文化を生み出し、継承していくために必要な要素がゲームとそのルールの中に胚胎しているので、ルー

表2 「2019 へのスクラム」各回授業の題目

回	授業題目
1	オリエンテーション
2	ゲーム観戦（VTR）前半戦を予備知識なしでみる
3	ゲーム観戦（VTR）予備知識を得て後半戦をみる
4	ゲーム観戦で感じた疑問や不可解な点について
5	スクラムについて知ろう
6	ラグビーとクーベルタン
7	ラグビーのワールドカップ
8	ラグビーの精神と文化
9	ラグビーワールドカップ2019 日本大会のレガシー
10	アフター・マッチ・ファンクション

ルに触れることなしに文化理解に及ぶのは難しい。

以下、各回の授業内容について順に摘要するが、なお、冒頭でレポートすると宣告した本科目の開講目的・経緯などはオリエンテーションの回に含めて述べることにし、手応えや自己評価についても同様に併記する形を採る。

① 1 時間目 オリエンテーション

初回の授業は、履修登録が確定する前に行われることから、教室にやってくる学生のほとんどは初回の様子を参考に受講するかどうかを最終判断する。どういう授業であるか、開講の経緯、目的、内容、そして成績の評価方法についてひと通り説明する。

そもそも「2019 へのスクラム」の発端は、映画『インビクタス』にある。

アパルトヘイトに対する反逆罪で1964年から1990年までの27年間収監されたネルソン・マンデラが釈放され大統領に就任、自国開催のラグビーワールドカップと自国代表チームを人種融和の促進に利用し、その成果を世界に向けてアピールすることで国家発展の基盤を固めようと尽力した実話に基づく物語である。ジョン・カーリン原作の *Playing the Enemy* (2008年8月刊) を、クリント・イーストウッド監督が映画化（初公開は2009年9月）。日本では

2010年の2月、FIFA ワールドカップ2010 南アフリカ大会の直前に劇場公開された。2011年によくこの映画の存在に気づき鑑賞すると、自身の中で再燃するラグビー熱があった。

高校生だった1970年代の後半、日本列島はラグビーブームに覆われていた。今のような一時的な盛り上がりとは異なり、国立競技場で行われる早明戦は超満員で、学生日本一が社会人チームの王者、新日鉄釜石に挑む日本選手権はちょうど成人式の頃で、晴れ着姿がスタンドを飾った。同じ頃だろう、民放かNHKかは忘れたが、五カ国対抗が深夜のテレビで流れていた。サッカーが三菱グループ提供のダイヤモンドサッカーでファンを広げたとすれば、ラグビーのほうは、イングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズ、フランスといったラグビーの伝統国がぶつかり合う戦いはそれは見応えがあった。最良は、鮮やかな展開力で敵陣を突破するウェールズで、あの3枚の羽根をモチーフにしたエンブレムのかっこよさに惹かれてレプリカまで買った。

ラグビーはもっぱらテレビ観戦が主で、学生時代に授業で少し体験できたくらいだったが、大学院に進学すると、同級生に早稲田出身、プロップでキャプテンだった山本巧（現・防衛大学校教授）がいたのには感激した。準研究員として体育センターに務めるようになり、高森秀

蔵先生の授業で丸々一年、週に一回ではあったがラグビーをプレーする楽しさを味わう幸運に恵まれた。

ラグビーにまつわる、こうして語り始めると切りがないほどの思い出が『インビクタス』によって蘇り、2011年のその年の9月、ニュージーランドで開催されるワールドカップに出かけた。

オールブラックスを擁するラグビー王国ニュージーランドで開催される大会、しかも日本代表はそのオールブラックスと対戦することが決まっていた。チケット入手に苦労しなかったのは、戦うまでもなく結果が明らかなカードで、ニュージーランド人も日本人も関心が低かったせいだろうか。日本代表はそれまでに2度、オールブラックスと対戦していて、直近はワールドカップ1995南アフリカ大会。17-145での大敗は「ブルームフォンテーンの悪夢」と語り継がれる。8年後の自国でのワールドカップ成功を宿命づけられた日本代表にはこの悪夢を乗り越え、日本のファンにどれだけ成長した姿を見せられるか、関心はこの一点にあった。

オールブラックス相手にどこまで通用するか、力試しにこれ以上のチームは望めない。しかし、ハミルトンのスタジアムで目にさせられたのは、勝利を放棄した日本代表の戦い、あまりにも惨めであった。

日本代表を率いたジョン・カーワン監督はニュージーランド出身、オールブラックス歴代のスーパースターのひとりだ。今大会で一勝を上げ、1991年大会でジンバブエを破って以来のワールドカップ通算2勝目を目標に掲げて臨んだ。それが2019年に繋がる道と考えたようだ。6日前のフランス戦にはベストメンバーで挑んだがあと一歩及ばなかった。しかしニュージーランド戦ではなんと、2軍クラスをグラウンドに送り出した。戦力をその後に控えたトンガ、カナダとの対戦に温存したのである。結果、ニュージーランドには7-83、トンガにも18-31で敗れ、カナダとは23-23の同点で大会を終え

た。目標に掲げた一勝すら上げられなかった戦績よりも、王者相手に力を試し、世界との差＝自分たちの位置を直知するチャンスを端から放棄した姿勢に失望した。後述するが、ラグビーにインスパイアされてオリンピック復活を唱えたクーベルタンは、競技の戦績よりもいかによく戦うか、努力と戦いぶりを重んじ、それを奨励した人物である。

では、ラグビーに注目する授業を行う最大の理由とは何か。しかも、そのワールドカップ日本大会を契機に行うのはなぜなのか。理由は、アフター・マッチ・ファンクションにある。

ラグビー界がまるで秘儀でもあるかのように大切に受け継いでいるアフター・マッチ・ファンクションは、最終回の授業でその模擬体験が予定されている。ラグビー精神が形象化されたものであり、このために必要とされる施設や環境、そして、そこで展開されるライフスタイルには、日本におけるスポーツのあり方や地域社会、生活のあり方を変える大きな可能性がある。ラグビーワールドカップのせっきくの日本での開催である。一時的な賑わいに終わらせず、その後の日本にとって大きな変革をもたらすチェンジ・エージェントとなるようアフター・マッチ・ファンクションに期待しているのである。

② 2時間目

ゲーム観戦 (VTR)

前半戦を予備知識なしでみる

ラグビーが敬遠されるのは、プレーの対象としてはその激しさによる怪我の心配があり、観戦対象としてはルールの難しさが指摘される。

英国パブリックスクールはそれでも積極的に教育に取り入れたのに対し、日本の学校体育では採用されず、普及・振興の面で不利な競技と言える。それでありながら、一時のラグビーブームはなぜ起きたのか、その疑問はさておき、良いものは良いと理屈なしにそう直感できるとすれば、まずはルールも見方なども一切知らずに黙って好ゲームを鑑賞してみる。そし

て、感じた事柄のいずれかを糸口に思考をうながし発展させていく。これから回を重ねる授業の入り口がVTRでのゲーム観戦である。

用意する映像は、ラグビーといえばなぜかそれを連想する者が初心者にもいるくらいに有名な、オールブラックスの直近の試合の中から選ぶことが多い。幸い、有料チャンネルJ-Sportsで「ザ・ラグビーチャンピオンシップ」(ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、アルゼンチンの4カ国からなる南半球屈指の国対抗戦。1996年に3カ国対抗戦として発足、2012年からアルゼンチン加入と共に名称が現在のものに)が放映されている。

前半40分を、キックオフ前のロッカールームでの様子、入場、国歌斉唱、そして、オールブラックスのウォークライであるハカも必ず見せる。試合開始に向けて選手、スタンドともに緊張感が高まっていく様は捨てがたく、国歌、ハカは後の回でも触れる内容であるので省くことはできない。ゲームが始まると遠慮がちなながらも歓声上がる。このレベルの対戦になると防御が固く、なかなか前進できない。そのためビッグゲインにつながるプレーが起こった時には、解放されたかのような歓声に変わる。ラグビーの面白さに素直に反応できる有望な感性をうかがわせる。

前半終了の笛と同時に映像を停止し、余計なことはいっさい口にせず感想を書かせ、次回の授業で紹介する。初学者にとってラグビーはカオスに映るらしい。それだけに混沌状態を脱してランプレーから奪うトライに強い爽快感を覚えるといった主旨のレポートが多く見受けられる。

③ 3時間目

ゲーム観戦 (VTR)

予備知識を得て後半戦をみる

「ラグビーのルールは難しい」という先入観を緩和するため、後半戦は、キックオフ前に少し、試合中にも試合後にもまた少しと数回に分

けてルール説明を入れる。説明の時間が長すぎると観戦の邪魔になるし、かといってあまりに基本的なルールについて無知なまま放置されるのも苦痛である。前中後で各5分、全体で15分程度を目安にしている。試合前には、得点となる4つの方法と点数(トライ5点、コンバージョン2点、ペナルティゴール3点、ドロップゴール3点)。

そして、スクラムでプレー再開となる反則は何か(ノックオン、スローフォワード)、観戦中に以上の二点が生じた際には映像を一時停止して再確認を行うほか、ゴールを目指して前進を図る基本的なプレーとして、ラン、キック、パスがあること、そして、ボールを持った相手プレーヤーに対してはタックルができること、パスは自分よりも前に投げることはできない(がキックパスはそれができ、前進を図るには有効な方法だが相手に奪われた時には逆襲をくらう危険がある)程度のことを説明する。これだけでも知れば、観戦当初に困惑したカオスは多少とも分節化され、混沌の中に少しは意味のわかることを見て取れるようになる。

いよいよゲーム終了、ノーサイドの瞬間、勝利を味方どうして喜び合い、敗れたチームは地面に崩れる者もいるが、互いの健闘を称え合う清々しい握手、抱擁が交わされる。

「ノーサイド」とは、海外では聞かない日本独自の言い方であるらしいが、ラグビーは、ボールを先頭にして両軍が右と左(サイド)に分かれて戦う競技で、ボールよりも前に出てプレーする行為は「オフサイド」という反則である。ルールを遵守しサイドに分かれ、自分たちの陣(サイド)を押し拡げ、相手の陣地をすべて飲み込む位置(ゴールエリア)まで侵攻を図る。オフサイドはラグビー以外にサッカー、アメリカンフットボール、アイスホッケーなどにもみられる反則だが、しかしそれらの競技ではボール(パック)より前でプレーをしたからといって反則ではない。ラグビーは非常にサイドに敏感な競技であり、それだけに「ノーサイド」

は大切なコンセプトなのである。

映像による観戦終了後には、後に予定されている文化論への架け橋としてこうして「サイド」「ノーサイド」を強調すると共に、試合後、フィールド上で見られたインタビューを振り返り、キャプテンが真っ先にインタビューを受ける理由に触れる。日本ではNHKであっても、監督が先で次に主将という順で行う現状を嘆きつつ紹介する。これに加えて、監督やコーチが（サッカーやアメフトのように）控え選手がいるベンチにいることはほとんどなく、観客がいるスタンドの後方に陣取っている点にも意識を向けさせる。

④ 4 時間目

ゲーム観戦で感じた疑問や不可解な点について

2回の授業を通して観戦したラグビーに対する受講生のもやもやは、3時間目に注入したわずかな知識と情報くらいで晴れるものではない。もやもやを言葉にして吐き出せればラクになれるのだろうが、かれらは、目にしている現象を言い当てる用語をまだ知らない。概念を端的に表現する言葉に不慣れな初学者である。

そのため、「ゲームを観戦してどんなことを感じた？」と尋ねると、面白い、凄い、迫力ある、カッコいい、痛そう、この段階ではまだこれらの発言の中にラグビー用語は登場しない。実況・解説を聞いていると、入門者がラグビーをテレビ観戦する際のハードルとなる耳慣れない言葉のなんと多いことか。ブレイクダウン、ノットロールアウェイ、モール、ターンオーバー、ラック、ノットリリースザボール、コラプシング、オーバーザトップ、グランディング、ラインアウト…。

ラグビーはコンタクトプレーや密集状態が多く、いったいそこで何が起きているのか、してはいけないことは何か、これらが多少なりとも

分かってくるとストレスも和らぐ。現象を分節化するのに有用なのが先に列挙したラグビーの用語である。

これについて学ぶ機会がこれまでなかったのだから解説は解説にならないだろうし、これを駆使してラグビーを語るなどまして望むべくもない。逆に言えば、専門用語は、その意味・概念を正しく習得すれば、複雑に思える現象を読み解く手助けとなり、ラグビーについて語る際の心強いツールにもなる。そこで、登場する頻度の高い言葉から順に、その意味を映像で現象と照合しながら憶えられるようにする。

このほかに初学者がよくつまづくことが2つある。ひとつは、モールやラックにおけるオフサイドラインの位置、もうひとつが、ラインアウトの際にどちらがスローインをするのかという疑問である。後者は、サイドラインの外に蹴り出したチームとは反対のチームが必ずスローインするサッカーとは異なるだけに戸惑うようだ。どちらがスローするかは、タッチ（サイド）に蹴り出したキックを行った位置にも関係するため、ラグビーのフィールドを構成するライン（ハーフ、タッチ、ゴール、10m、22m）と一緒に憶えるようにしている。

「選手ですらルールをすべて知ってプレーしているわけでない」。この真偽はさておき、ラグビーのルールはそれほど難しい。複雑で度々変更されるラグビーのルールは、怪我の予防と見応えのバランスを図ろうと苦慮を重ねた末の産物なのであろう。ラグビーに限らず、観衆がスポーツに求める激しさに際限はなく、とどまることのない残酷さから選手を守る役割がルールにはある。

各々のルールがなぜ生まれたのか、なぜ変更されることになったのか…こうした疑問は受講生からは全く出てこない。これではいけない。

ラグビー私観

「2019 へのスクラム」には、自身のラグビー観がその開講動機として関係しているし、授業内容にも反映されている。あらためてそのラグビー観を顧みると、「無差別級の格闘技」「仲間の救助」「偉大なる虚しさ」「優越意識」がキーワードになる。

多くの格闘技種目は、ひとりの対戦相手に対して集中することができるが、ラグビーの場合、敵のタックルはまだしも、味方選手が後方から突然、容赦なく体当たりしてくる。格闘技さながらの激しさでありながら階級もプロテクターもない。味方が敵に捕まるや救助に駆けつけるその迅速たるや。選手に言わせれば救出するのはあくまでボールであるらしいが、素人には仲間に見える。なんと友情に厚いスポーツか。オリンピックの3つのバリューのひとつ friendship がかくも鮮やかにプレーに表出されているではないか。

屈強な男どもが発揮するエネルギーは実に虚しくも見える。スクラムが生み出すものは、ヒールアウトされるわずか一個のボールだけである。堂々たるジェントルマンが16人も集結し、全力で協力した末の目に見える成果はたったこれだけ。だが、かれらは「生きたボール」を出すことに必死で、力の出し方のクオリティを追求している。少し冷静に見ると滑稽なほど虚しいスクラムも、ダルマゾ、長谷川慎といったスクラムの精度に磨きをかける職人肌のコーチらのスクラム哲学に触れ、組み合う選手たちのミリ単位のこだわりを知るにつれ偉業に思えてくる。

しかし、ラグーマンやラグビー界の「優越意識」が普及の壁になっているとは『ラグビーの世界史』でトニー・コリンズが示唆するところで、パブリックスクール、オックスブリッジ出身のエリートたちがアマチュアリズムのもと、世界一を決することに汲々としてことなくラグビーのワールドカップの始まりはサッカーに遅れること半世紀を超えている。

さて、選手たちのプライドとそれを具現するようなプレーと言動とが、2019 ワールドカップ後の日本におけるラグビー人気を支えている要因とみられるが、しかし、はからずもそれがファンを遠ざけ普及の壁となるのか。いや、キャプテンがチームのリーダーであるように、ラグビーはそのプライドをもって日本のスポーツと社会の導き役となってもらいたいものである。

⑤ 5 時間目

スクラムについて知ろう

ひとつ前の4時間目にも受講生からスクラムに関する質問が寄せられる。科目名が誘うのかも知れないが、なぜ、科目名に「スクラム」を選んだのかという（苦し紛れの）疑問をぶつけてくる者もいる。

学生運動の激しい頃に計画された筑波大学は「開かれた大学」をモットーに掲げ、それを体現するかのようにキャンパスと周囲とを隔てる塀壁がなく、警察車両が学内を走行するという国内の他大学ではおそ見られない光景が現出する。集会、立看板、拡声器使用などは届出制と定められ、学生担当教官室なる学生監視組織

がかつてはあり、危険かつ雑然とした動線、3学期制など、この大学の施設・制度の設計思想には「学生運動の予防」が根底にあるとはあながち冗談ではないように思える。学生を去勢する仕組みと仕掛けが見えざる力として働き、今や、鉄パイプとヘルメットが支給されようとスクラム組んでデモするような学生などいない時代になってもなおその力が根を張っているようで恐ろしい。

“スクラム”を科目名に据えたのは、この大学に巢食う目に見えない難敵に挑む意気込みを暗示するためでもあった。三学期制の時代、試験は年間3回、卒業までに12回あり、二期制の他大学は8回であるから疲労度は単純に1.5



実際に組んでポジションや仕組みを知る

倍、体育にいたっては4年間必修であった。これでは学生運動に向ける体力など残るはずもない。大学の形や成り立ちを難詰しようとスクラムをあえて掲げたわけではない。そうではなく、大学入試をパスし、筑波大学に入学したまではないが、活力が奪われ夢、希望が萎れるような感覚に襲われないとも限らない。その原因の一端でも知れば、向き合い方も気の持ちようも異なるに違いない。

「2019 へのスクラム」は、実技の授業ではないが、スクラムに関しては実際に組んでみる。まずは、8人のフォーワードのうち、第一列目といわれる左右のプロップと中央のフッカーの3人が横一列に組み合う仕方を体験する。ラグビーでは、試合中、主審の「クラウチ」「タッチ」「バインド」の合図に従い、両スクラムの第一列目どうしが組み合うのだが、相手の頭のどちら側に自分の頭を組み入れるかが決まっている。第一列目の3人のうち、背番号2番(フッカー)と3番(右プロップ)の二人は自分の顔を相手二人の頭のあいだに差し入れるせいで耳が両方とも圧迫され変形することがあるが、1番(左プロップ)は相手の3番と擦れる右耳だけで済む。「笑わない男」の稲垣啓太選手のポジションがその左プロップである。

「ラグビーが日本でもようやくメジャーになった。」そう言えるのは、ラグビー選手の体型と耳を見てすぐにポジションを言い当てられ

る人が多くなった時だろうか。

味方8人の陣形を整える前に、敵味方一列目の3人どうし、6人で組み合ってみる。といっても膝を少し曲げて腰を折り、恐る恐る相手の頭の間に約束通りにそっと自分の頭を差し入れ、押し合うことは絶対にせず、スクラムらしいと思う形を作るだけである。ラグビー経験者がいる時は、片側3人をかれらに頼み、組み合う際の稽古台にできればより安全である。初心者どうしは無意識に押し下がり下がりたりの動きが生じてハラハラさせられる。次に2列目となるロック2名が加わり、さらに3列目のフランカー、ナンバーエイトが加わるというように、ポジション名も覚えながら、前後の列との組み合う仕方、特に腕の位置と使い方をひとつひとつ順に学ぶ。

相手との組み合わせも3対3に始まり5対5、8対8へと段階的に増やしていくが両手が塞がっているため崩落が怖い。安定して組み合えるようになるとスクラムハーフ役がボールを入れ、それをヒールアウトさせる体験もさせる。こうした実体験によってスクラムの構造、ヒールアウトされるまでのボールの経路、ポジションと役割などが理解できるようになる。

スクラムにまつわる反則も紹介する。スクラムを故意に崩すコラプシングを反則とする理由には納得しても、ノットストレートには疑問を呈する声が出る。映像ではどうみてもまっすぐ(スクラムの敵味方の境界線)ではなく、味方側に入れているように見えるというわけだ。しかし、ラグビーはコンテストを旨としており、スクラムもラインアウトも敵味方の境界(中央)に投げ入れたボールを争奪するのが原則で、大きく逸れると反則(ノットストレート)となり、逸脱の程度をみる審判の判断に委ねられている。

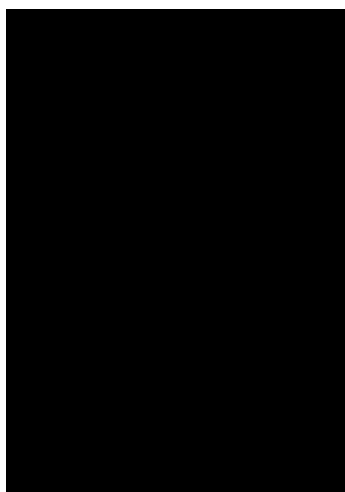
⑥ラグビーとクーベルタン

ラグビーの歴史について、その名称を入り口

ラグビーの歴史は、たとえ民俗フットボールの歴史にまで遡らないとしても、とても75分には収まらない。そこで、オリンピックと関連づけてラグビー史の一端を紐解く方略を採る。というのも、「2019 へのスクラム」がスタートした2013年10月は、その1ヶ月前に2020TOKYOが決まった時機であった。ラグビーはオリンピックの競技種目になっているが、これは2016年リオデジャネイロ大会からのもので、しかも本科目が扱う15人制ではなく7人制ラグビーである。

オリンピックの歴史を遡ると、1900年のパリ大会から1908年、1920年、そして1924年のパリ大会と4大会で男子15人制が行われている。それ以降は途絶えるが、リオ大会で7人制として復活する。なぜオリンピックから除外されたのか、なぜ7人制であるか（ここでは省くが）。近代オリンピックの父、ピエール・ド・クーベルタン（1863-1937）とラグビーには大変に深い関わりがある。もしも彼がラグビーに出逢わなければオリンピックはなかったNo Rugby, No Olympicといっても過言ではない。それはクーベルタン自身がラグビーを好み、国際試合の審判経験があるというだけではない。

今日のラグビーの基礎となる最初のルール



ラグビーにも影響を受けた

は、1845年にパブリックスクールの有名校のひとつ、ラグビー校の生徒4人によって成文化された“フットボール”のルールである。ちなみにこのルールブックはポケットに入れてプレーヤーがセルフジャッジできるよう小冊子（縦9cm横6cm、16ページ）になっている。ラグビー校におけるこの頃のフットボールは、1823年にエリスという名の少年（同校の生徒であるかどうかは不明）がフットボールの最中にボールを抱えて走ったとの言い伝え（この真偽は定かでない）があることから、今日のサッカーのように手を使えないゲームではなく、今日のラグビーのようにボールを保持できるものであった。

ラグビー校での寄宿舎生活を活写した『トム・ブラウンの学校生活』（1857年刊）の著者トーマス・ヒューズ（1822-1896）は、自身がラグビー校の生徒として体験した事柄をもとに、トム・ブラウンの成長を、アーノルド校長（1795-1842）の思想的・教育的影響と関連づけて描いている。ヒューズ自身は1834年1月にラグビー校に入学し、ラグビー校のフットボールルールが成文化される直前に卒業している。

『トム・ブラウンの学校生活』は海外でも広く読まれ、その影響も大きく、クーベルタンも熱心な読者のひとりであった。フランス出身のこの貴族は、12歳で初めてこの書に触れ、教育家アーノルドに心酔し、1883年と1886年の2度にわたってラグビー校を訪れ、黄泉の客となって久しいアーノルド校長の教えがそこに現存していると感涙したと言われている。

クーベルタンがラグビー校のグラウンドで目にしたのは、40年も昔に成文化されたルールによるフットボールであった。彼は、やんちゃな少年からジェントルマンへのトム・ブラウンの成長を、このラグビー・フットボールをはじめとするスポーツによる教育の効果であると受けとめ、そして、オリンピックにもこうしたスポーツによる教育的効果を要求するに至るのである。このこだわりが、やがて「オリンピズム」

と呼ばれるオリンピック理念の契機となっている。

ラグビー校などのパブリックスクールに導入される以前のフットボールは、あそびや祭りとしてそれぞれの地域で行われていたもので、もちろん子どもたちにも大変人気であった。しかし、フットボールの祭りとして今日に伝わる、たとえばイングランドのアッシュボーンで開催される有名な Royal Shrovetide Football を見るとどうだろう。アッシュボーンの街を二分し、上町と下町が住民総出で行う大規模の祭りは、ボールそっちのけの乱闘も珍しくはなく、けが人が出るほどの激しさはとても幼い子どもたちが加わられる代物ではない。「フットボール」と呼びはするものの、ボールは陸地に限らず川にも飛び込む。水中での奪い合いはさながら水球のようでもある。

いずれにせよ、子どもたちもプレーはしたいが近寄りやすい。パブリックスクールはこの民俗フットボールの危険性を小さくして導入を図る。各校では独自のルールでゲームが盛んに行われる。やがて学校間の対戦（対校戦）の気運が高まるとルールの統一が必要となるわけで、最終的にラグビー校のルールが浸透する。パブリックスクールの卒業生たちがオックスフォード、ケンブリッジなどの大学でもフットボールをプレーするようになり、さて出身スクールによってルールが異なるようではとてもゲームにはならない。統一ルールは歓迎されたであろう。

こうしてイギリスにおいてフットボールから派生したラグビー・フットボールはやがて英連邦の国々（オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、南アフリカ、フィジーなど）へと伝播する。いずれもワールドカップの常連国である。

⑦ 7 時間目

ラグビーのワールドカップ

ラグビーのワールドカップについてはその通

史を語るよりも、『インビクタス』の舞台となり、ワールドカップ初出場・初優勝を果たす南アフリカのラグビーを中心に取り上げる。

2019 年の日本でのラグビーワールドカップは、ホームユニオンと言われるイングランド、スコットランド、アイルランド、ウェールズ、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ以外の国で行われるはじめての大会である。

ラグビー最初の国際試合は 1871 年、イングランドとスコットランドの対戦にさかのぼる。これを境に、やはり国どうしの国際試合が不定期に举行される。元来、ラグビーの母国であるイングランドに対して他の後発国が力試しをするという意味で用いられた「テストマッチ」も、今では、国どうしの対抗戦を指す言葉となった。1987 年にワールドカップが始まり、世界の強豪国がトーナメントによって最強国を決するようになったが、それまでは、そのシーズンに行われたテストマッチの結果を総合的に考量し、いずれが最強かを推し量っていた。常に最強国のひとつにあげられたのが、ワールドカップ 2019 日本大会で三度目の優勝を飾った南アフリカである。オランダに次いで入植したイギリス人によってラグビーが伝わった南アフリカでは、ボーア戦争（1899 年より断続し 1902 年終結）で頂点に達したオランダ系白人（ボーア人）とイギリスの衝突を経て、その後のラグビーはボーア人がイギリス人に対抗意識をたぎらせる場でもあった。

アジアが初めて迎えるオリンピックが東京で開催された 1964 年、ネルソン・マンデラが国家反逆罪で捕えられると、南アフリカが参加する東京オリンピックをボイコットする動きが起る。国際オリンピック委員会（IOC）は急遽、南アの参加を許さず東京は難を逃れることができたが、1968 年のメキシコオリンピックでも再びアパルトヘイトに反対する国々の抗議が激化し、IOC はついに南アフリカを除名する。南アのスポーツ界はこれ以降、国際大会への出場はかなわない状態に置かれる。



自国開催のW杯を人種融和に巧みに活用した

だが、当時ラグビーはオリンピック種目ではなかったこともあり、テストマッチを続けられた。しかしながら、遠征先となったイギリス、オーストラリア、ニュージーランドなどでは試合の妨害にとどまらず、移動中や宿泊先でも抗議のターゲットとなる。1976年、オールブラックス（ニュージーランド）の南ア遠征に対しアフリカ諸国が捨て身の行動に出る。同年のモントリオールオリンピックにニュージーランドが出場するのであれば、参加を見送るとアフリカ諸国は詰め寄ったもののIOCはニュージーランドを排除することはなかった。結局、モントリオール大会は、前回のミュンヘン大会（1972）より29カ国少ない92カ国の参加となった。

国際社会においてスプリングボックスはアパルトヘイトの象徴とみられ、1985年のニュージーランド遠征（中止）を最後に国際試合は途絶え、1987年、1991年の第1回・2回のワールドカップとも出場できなかった。ようやく1991年にアパルトヘイトが廃止となると、翌年にスプリングボックスとオールブラックスのテストマッチが行われ、オリンピックへの復帰が1992年のバルセロナ大会で叶う。1993年、南アフリカはこうした流れのなかで第3回ワールドカップの開催地に選ばれる。

マンデラが1994年に国民投票によって大統領に就任すると、白人に対する黒人の復讐が始まり、南ア代表の愛称、ユニフォームの色やエンブレム、そして国歌をアパルトヘイト時代の

ものから刷新しようとの動きが活発になる。マンデラはそれをよしとせず、人口全体の1割の白人を代表するスプリングボックスを自らが率先して応援することで、黒人には赦すことの大切さを説き、白人には黒人に対して恐れを抱く必要のない寛容さを示した。決勝で、延長の末の劇的な勝利でオールブラックスを破ったスプリングボックスは、ピナール主将が勝利インタビューで、スタジアムの6万2千人の観客の声援が力になったかと問われると間髪を置かなく答えた。「応援してくれたのは6万2千人のファンではありません。4千300万人の南アフリカ国民です。」

ラグビーワールドカップを利用したマンデラによる人種融和の促進と世界へのアピールによって、新しい時代を迎えた南アフリカ。その国と日本が史上初めて対戦したのがワールドカップ2015イングランド大会である。2019日本大会でも再び対戦した。スプリングボックスの主将には初めて黒人選手が選ばれ、スタンドには黒人ファンの姿も見られた。南アフリカの変化はラグビーにもうかがえるのである。

とかく日本のマスコミによる報道内容は自国のチーム・選手に偏るきらいがある。対戦相手についてもチームやプレーヤーの情報にとどまらず、国の成り立ちやラグビーの歴史、文化なども念頭に観戦するのでは、意欲、視点、感動にどのような違いが生ずるかはわからない。そうだとすると、他に関心を寄せながらも、自他の差異の根絶を図る「世界主義」ではなく、自他の歴史・文化間の差異を尊重する「真の国際主義」をめざす上でも、授業では日本代表に特化したワールドカップ史にならないよう留意している。

⑧ 8 時間目

ラグビーの精神と文化

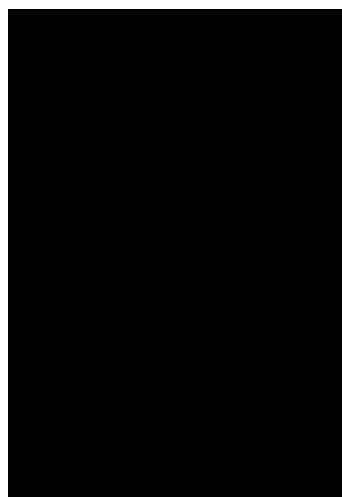
ワールドカップ2019に向けて日本ラグビーフットボール協会（JRFU）は、世界と日本中に「ノーサイドの精神を広めたい」との意欲を

口にした。しかし、精神 (mind) とは捉え難く、伝え難いものでもある。

コーポレートアイデンティティの理論によれば、マインドは、ビジュアル・アイデンティティ (コーポレートマーク、コーポレートカラー、ブランドマーク、広告、CMなど) に可視化し、また、行動 (ビーヘービア・アイデンティティ) に移すなど、要は目に見えるよう表す工夫が大事というわけだが、2013 年 11 月 2 日、目を疑う行動を目撃した。

秩父宮ラグビー場にニュージーランド代表オールブラックスを迎えての日本代表のテストマッチ。ワールドカップ 2015 イングランド大会を翌々年に控えての強化試合であった。2011 ニュージーランド大会では 2 軍を当てて玉碎された日本代表の今度こそ「真の力」が見られる期待の一戦。途中から小雨が降り始める。歯が立たない。試合終了を告げるホイッスル。ノーサイド。ラグビー王国の代表選手たちはチームで喜びを分かち合うよりも前に、我が日本の代表選手たちと握手をしようと歩み寄る。だが、どうしたことか、日本チームは円陣を組み、自分たちだけで何やら始めた。反省会だろうか、王者の手は虚しく空を握るしかなかった。日本協会が伝えたいノーサイド精神とはこの時はまだ絵に描いた餅にすぎなかった。

あれから 6 年が経過した 2019 年、二カ月前にいよいよワールドカップ開幕を控えた 7 月のこと、『ノーサイド・ゲーム』(原作・池井戸潤) なるテレビドラマ (全 10 話) の放映が始まる。タイトルにある「ノーサイド」の直截な説明など一切ない。全話を通してこういうものだとそれとなく語りかけ、こういうことなのかと考えさせる。これぞ、ラグビーのマインド・アイデンティティを伝えるすぐれたビジュアル・アイデンティティの見本である。大会自体よりもこのドラマに影響されて「にわかファン」になり、ワールドカップによってさらにラグビーに関心を寄せるようになったという人にも多く会えた。しかしである。



テレビドラマと同名の原作

ラグビー特有の「ノーサイドの精神」を行動として形として最も端的に表すはずのアフター・マッチ・ファンクションのシーンは、原作にもテレビにも一つもないのである。それを批判するつもりはないが、ラグビーワールドカップ日本大会を、日本のスポーツ、社会のあり方を変革するチェンジ・エージェントとして期待する者としては不満が残った。

ラグビーでは試合終了後、チームの交流会が試合会場の一室でひっそりと行われる。汗と泥をシャワーで洗い流し、正装に身を包んで臨む。バスタブがひとつしかないスタジアムでは両チームと一緒に湯船に浸かり、背中を流し合うような時代もあったらしい。アフター・マッチ・ファンクションは主催者の挨拶に始まり、主審による講評、両チームの主将挨拶に続いて乾杯が行われ、小一時間ほど軽食とその日の対戦やお互いの近況などを肴にビールを飲み交わす。近年は、選手のコンディショニングを優先するとかの理由で縮小・廃止の傾向にあると聞くが、絶やさないでもらいたいラグビー界ならではの伝統でありアイデンティティである。

アスリートにしても体育系大学・学部の学生・院生といえどもラグビー関係者以外、アフター・マッチ・ファンクションについては存在

はおろか名前すら知らない。さらに驚くのは、当のラグビー関係者たちが、他の競技でも同じように行われているものと思いこんでいる点だ。ラグビー関係者にとってアフター・マッチ・ファンクションは特別なものとの自覚はないのだろう、これをPRすることもなければ、なぜか、マスコミが取り上げることもほとんどない。こうなるとアフター・マッチ・ファンクションは秘儀と言っても過言ではない。

全身疲労にアルコールが加わり気分が高揚すると、肉体自慢、力試しが個別に始まったりもするこの秘儀に関して3点ほど強調する。

第一に、ファンクションには審判も招かれ、会の冒頭に主審がその日のゲームの講評を行うという点である。主審は各チームの良かった点を評価するだけではなく、課題を伝えることを忘れない。試合でもラグビーの審判は他の競技の審判とは違い、積極的にプレーヤーと対話している様子は奇異に見えるだろう。サッカーの審判が、反則や不正を取り締まり、試合が荒れないようコントロールに重きを置いているとすれば、ラグビーのほうは、反則などで自滅しないよう予防に努めている感が強い。オフサイドの位置にいる選手には予めそのことを知らせて注意をうながし、反則があった場合にはなぜ反則であるかを説明する。マイクを通じて聞こえる主審の口調は実に穏やかで、非情な裁定通告者ではなく更生を望む説論者といった印象を受ける。結果としてゲームは、不用意な反則で中断することは少なく、オーディエンスにとってもゲーム進行がスピーディで、興味を殺がれたり退屈したりする隙がない。

スポーツにはゴルフやカーリングのように今でもセルフジャッジで行われる競技もあるが、今でもそのようにして遊ばれているラグビーもあるだろうし、競技としてもそうした時代があった。だが、セルフジャッジに限界を感じた両チームが第三者に審判を頼むようになるのは自然の流れである。ラグビーでは、審判に対する選手からの確認行為はあっても執拗な抗議は

ほとんど見られない。審判への抗議は、かれを信任したみずからの人選を否定すること、つまり自己否定となるからであろうか。VAR（ビデオ判定）で判定が覆る場面が増えてきたサッカーで審判がますますその権威を失いつつある状況とはあまりに対照的である。

次に強調したい点は主将のあり方である。他の競技では監督が前面に取り上げられるが、ラグビーは主将のリーダーシップに委ねられるところが大きく、試合中に監督がベンチにいない点がそれを象徴している。スタンドの奥に設けられた専用席に押しやられ、インカムを使ってウォーターボーイ（給水係の選手）経由でグラウンドの選手に指示を出しているとはいえ、試合中は主将の判断が優先される。それで思い起こされるのがワールドカップ2015 イングランド大会で南アフリカを破った日本の戦い、いわゆる「ブライトンの奇跡」である。

試合終了間際、南アの反則によって得たペナルティキックでの同点狙いを放棄した日本代表は、トライでの逆転勝利に賭けてスクラムを選択する。エディ・ジョーンズ監督からの指示はキックだったが、「新たな歴史を作る」と誓った主将マイケル・リーチはそれを無視した。南ア相手に同点という歴史的快挙を飾れるチャンスのみずから手放した選手たちに対し、かつて南アフリカのコーチを務めた経験からその強さをよく知るエディ・ジョーンズは憤慨しインカムをデスクに叩きつけた。

主将はアフター・マッチ・ファンクションにおいてチームを代表してスピーチし、相手チームに対する感謝と敬意の気持ちを言葉にしなくてはいけない。試合直後のインタビューでマイクを向けられる主将は、観客と相手チームに対して杓子定規ではない気持ちのこもった言葉を捧げる姿は実に見事であり、感動させられる。アフター・マッチ・ファンクションを慣例とし、スピーチの機会が多いラグビー界ではそれほど不思議な現象でもないようである。

三つ目の強調点は、アフター・マッチ・ファ

ンクションを行う場所すなわちクラブハウスについてである。

試合の後に限らず、練習の前後であろうと仲間との交流はまた楽しい時間である。日本でスポーツの普及基盤となった学校にある「部室」とは「クラブハウス」の訳語であろうが、中身は本場のものとはずいぶん異なる。

スポーツ庁が普及推進する「総合型地域スポーツクラブ」はドイツのスポーツクラブをモデルにしている。ドイツは日本とは異なり地域が人々のスポーツ活動の場であり、クラブが住民どうしの親睦を深める交流の機会を提供している。社交は何も運動の最中におけるそれに限らない。前後の交流にも機会を見出し、そのためにクラブハウスが整備されている。先輩たちが優先的に使用する、着替えと用具置き場を兼ねた部室に慣れた感覚からは想像するのは難しい。クラブハウスにはトイレやロッカールームはもちろん、シャワーやミーティングルーム、展示スペース以外にカフェやパブ、レストランなどの飲食施設が完備し、アフター・マッチ・ファンクションに対応できるのは言うまでもない。

日本でも、ラグビーのトップリーグのチームやサッカーのJクラブにも「クラブハウス」を持つところは少なくないが、残念ながら、地域密着などと謳う割には選手と住民の交流に利用されるわけでもなく、クラブオフィスといったほうが適切と思える設備・機能である。ゴルフ場もコース（プレイグラウンド）の他にクラブハウスを完備し、飲食も楽しめる仕様になってはいるが、利用者は遠来の会員が多いことから、会員どうしの交流も限られ、地域住民との繋がりなどはほとんど意識されてないだろう。総合型地域スポーツクラブの普及を図るためにも、運動場の確保と同じかそれ以上にクラブハウスが不可欠である。クラブハウスとは名ばかりのものにならぬよう、クラブライフのビジョンとイメージをまずは抱かなくてはならない。アフター・マッチ・ファンクションはクラブライフ

の一部に過ぎないとしても十分な魅力を備えており、それは日本のスポーツと社会にクラブハウスを広める動機にもなりうるだろう。

アフター・マッチ・ファンクション、そして、これを行うためのクラブハウス。これをセットでプロモーションできるのが、まさしくその良き伝統を有し、見本を示せるラグビーなのである。日本ラグビー界がワールドカップ2019日本大会を契機にノーサイドの精神を広めるというのであれば、それがよく具現化されているアフター・マッチ・ファンクションとクラブハウスのプロモーションを行うことが人々には分かりやすい。それだけではない。一人暮らしの高齢者が増える人生100年時代の日本社会には、人々の生きがいとそれを支える地域住民どうしの互助・協力が不可欠になろう。クラブハウスを拠点としたクラブライフはスポーツをはじめ住民の様々な交流を生む機会を提供してくれる。ワールドカップ日本大会を機に、多くの国民がラグビーに注目している今こそ、ラグビーを通してアフター・マッチ・ファンクションとクラブハウスの存在と魅力を発信し、普及・拡大につなげることができればワールドカップ2019の誇るべきレガシーとなるはずだ。

⑨ 9 時間目

ラグビーワールドカップ2019日本大会のレガシー

2019年に日本で開催されたラグビーワールドカップの成果はすでに様々に語られているし、これからも新たな波及効果が随所に現れてくるとみられる。

振り返れば、ワールドカップ日本大会の開催決定（2009年）は、東京オリンピックの招致活動の陰にかくれ、一部関係者のあいだで話題にされた程度であった。しかし、開催決定後は競技力強化の成果があらわれ、ワールドカップ2015では南アフリカを破ったのを皮切りにその勢いに乗ってプール戦で3勝をあげる大躍進をみせ、2019日本大会ではついに悲願のベス

ト8入りを果たした。

ワールドカップの日本開催決定当初は日本代表の弱小ぶり、決して人気スポーツとは言えない状況も手伝い観客動員が危ぶまれたが、いざ始まってみると12会場いずれもが満員かそれに近い観客がスタジアムを埋めた。日本代表戦のテレビ視聴率もチームの躍進があつて初戦のロシア戦から右肩上がりに上昇、最後の南アフリカ戦では40%を超えた。今回の日本大会に対する主催者側の評価も非常に高く、「強国のあいだでパスを回しているだけでは、ラグビーは世界に広まらない」との訴えに煽られた主催者にとっては、拭い切れない不安の中で開催した大会であつた分、さぞ驚きも大きかったに違いない。日本がみせた、主催者の不安を覆す国際大会の開催力は、今後の大会誘致・開催に弾みとなる自信をもたらしたであろう。

試合が行われた12会場のうち、最も小さいスタジアムが釜石市の「鶴住居復興スタジアム」である。釜石市も東日本大震災で甚大な被害を受けたが、スタジアムが建設された地にあつた中学校の生徒たちは瞬時に津波の到来を察知し、隣り合う小学校の児童の手を引き、少しでも高い避難場所を目指して駆け上がり、ほぼ全員が難を逃れ「釜石の奇跡」と呼ばれている。

釜石は、かつてラグビー日本一の座に連続7年君臨し、“北の鉄人”の異名を持つ新日鉄釜石ラグビー部の伝統を受け継ぐラグビー熱の高いまちである。ワールドカップの開催地に名乗りを上げ、鶴住居地区の奇跡の学校跡地にスタジアムを建て、プール戦2試合が行われると、奇跡が奇跡を呼んだ。1試合目となるフィジーとウルグアイの対戦。すでに札幌でオーストラリアを相手に初戦を戦ったフィジーは、休息わずか3日間とはいえ世界ランク9位の強豪。これに対する18位のウルグアイは、釜石での一戦は初戦であるとはいえ実力差からして勝利は厳しいとみられた。

選手入場。ウルグアイの主将に手を引かれて入場した8歳の少年（マスコットキッズ）がウ

ルグアイ国歌を実に晴れやかな表情ですらすらと歌い切った。これにはガミナラ主将も「こんなことは初めて」と驚きを漏らしたが、少年がもたらしたのはウルグアイの大金星かも知れない。「釜石の奇跡」にまつわる場所でのウルグアイによる「釜石の奇跡」は、まだまだ復興途上にある釜石市民に対し困難に挑む勇気を与えたであろう。

難敵に対するウルグアイの不屈の闘志が呼びこんだ勝利は、あの「アンデスの奇跡」のDNAによるものと思つた人もあつたに違いない。1972年にウルグアイのラグビーチームを乗せたチャーター機がアンデスの山中に墜落、追い打ちをかけるように襲い来る雪崩に怯えながらも72日ものあいだ寒さに耐え飢えを凌ぎ16人が生還した。奇跡の連鎖と思える一連のストーリーもまた、日本大会のレガシーのひとつとして語り継がれるであろうか。

2試合目のカナダとナミビアの一戦は大型台風19号の影響により中止となった。釜石での数少ない試合を楽しみにしていた地元ファンには、失望以上のサプライズがあつた。カナダ、ナミビア両チームの選手、スタッフが釜石、宮古にて台風被害の復旧作業を手伝ったり、作業に当たる人たちを励ましたりした。ラグビーのまち釜石はこうして世界に向けてラグビーの力を発信する一役をはからずも担ったわけで、これまた後々まで語り継がれるエピソードとなるに違いない。正直なところ、釜石には地味なカードが割り当てられたのだと気の毒に思っていたが、さすがラグビーのまちは望んでも得られないレガシーを引き当てたのである。

レガシーはキャンプ地となった地域にももたらされた。

今大会4位になったウェールズのキャンプ地となつたのは北九州市である。当地で行われた公開練習で、会場を埋めた1万5000人の北九州市民が選手たちをウェールズ国歌の大合唱で迎えた。子どもたちは、お気に入りの曲でも口ずさむかのように国歌を歌いながら選手に近づ

き、握手、サインを求める様子が動画サイトでも見られる。学校で教えられたもののだとしても、「こんなことは初めて」とウェールズの選手たちは驚きと感激を表した。おもてなしのほんの一端に過ぎないだろう。大会の全日程を終えチームが帰国するという時、ウェールズ協会は、北九州市民に対する感謝の気持ちを伝える広告を地元新聞に出した。「北九州市民のみなさまへ」と題し、次のメッセージが同国のナショナルカラーである赤地に白文字で刻まれている。

みなさまのサポート、そして素晴らしいおもてなしを頂いたこと、心より御礼申し上げます。2年間に及ぶ交流を通じて、北九州は私たちウェールズ国民にとって、特別な場所になりました。“Diolch.” Thank you. ありがとうございます。また近々みなさまにお目にかかえることを心待ちにしております。WRU ウェールズラグビー協会より（毎日新聞 2019 年 11 月 2 日西部支社版）

憧れのウェールズはやはり、かっこよかった。しかし北九州市も負けてはいない。5日後の11月7日、ウェールズの地元紙に、ウェー



毎日新聞 2019 年 11 月 2 日

ルズカラーで日の丸を型取り、その中に白文字で「ありがとう」と大書きし、喜びと感謝のメッセージを添えている。北九州市を選んできたこと、おもてなしできたこと、公開練習を見られたこと、ウェールズの美しい国歌を習い歌えたこと、ラグビーを通して日本を鼓舞してくれたこと。「いつでもまたみなさんを歓迎します，“Go Go Wales”」と結ばれている。これだけにとどまらず双方にとって今回のラグビーワールドカップはさらなる交流に繋がる大きな契機となった。

2019 年 2 月 22 日、北九州市とウェールズラグビー協会は「レガシー協定」を締結するに至ったのである。両者の交流の様子は広く配信、フォローされて、北九州市にとっては多大なシティ・プロモーション効果も得られた大会となった。さて、他の開催都市やキャンプ地でははたしてどのようなレガシーが生まれ、育っていくのか。期待のアフター・マッチ・ファンクションやクラブハウスはどうだろうか。

⑩ 10 時間目

アフター・マッチ・ファンクション

筑波大学の開学は 1973 年である。初代の体



Western Mail. Wales 2019.11.7

育センター長・大石三四郎先生は、「体育センターの実技科目にはオリンピック種目をすべて揃える」と宣言したらしい。その頃は、ラグビーはすでにオリンピック種目からは外れていたもので、ラグビーの授業が開学時からあったかどうかは知らない。しかしラグビーの授業が開講されていた時期があるのは確かで、高森秀蔵先生が受け持つ授業に研修生として加えてもらった経験は忘れられない。1990年、その当時の一般体育はいわゆる「大綱化」の直前で、本学の体育は全学4年間必修で、授業は通年（4月～翌年2月）にわたり30回ほどあった。

ラグビーの授業には、高校時代にかかなり慣らしたとおぼしき連中のなかに科目抽選に外れてラグビーに回ってきた者も混在した。少年トムがジェントルマンに成長するかのようになり、とは大げさかもしれないが、高森先生の熱血指導に鍛えあげられ逞しくなっていく。スクラムは、さすがに押し合いは禁じられたが、熱が入ってくるとそうはいかなかったが本格的に16人で組み合わせ、最終的にはユニオンラグビーの試合にまで持っていく指導力は鮮やかであった。

「来週は試合をするから各自ビールを持って来るように！」

試合とビールにどんな関係があるのか。試合後に乾杯するのだという。しかし授業である。ラグビーの慣例、流儀であるような説明があったことは記憶にあるが、アフター・マッチ・ファンクションとは聞いた覚えがない。しかし、今こうして振り返ると、あれはまさしくアフター・マッチ・ファンクションであったのだ。なんと立派な実技か、まさに迫真の指導である。ペンギン柄の100mlサイズの缶ビール1本で真っ赤に顔を染めていた高森先生と授業のことをビールを飲むたびに懐かしんでいる卒業生もいるだろう。

さて「2019へのスクラム」のアフター・マッチ・ファンクションのほうはどうかと言えば、さすがにビール持参とはいかず、それぞれに好みの飲食物を持ち寄り、机を合わせて作った大

テーブルにそれを広げ、正式なプロトコルに倣って行う。挨拶（嵯峨）、講評（竹村）、主将スピーチ（受講生から2名）、そして乾杯、歓談と続き、閉会の際には引出物の代わりにレポート課題を言い渡す。「来年度の『開設授業科目一覧』に掲載する授業概要の文案を書け」。

おわりに

レポートはメールで提出させる。全員のレポートをひとつの文書ファイルに編集し、そして全員が目に見えるようメールでフィードバックし、そして、その中から「2019へのスクラム」を最もよく言い当てていると思えるものを一点選ばせる。得票の多いものを『一覧』に掲載する。こうすることで全員がすべてのレポートに目を通し、責任をもって一票を投ずる。みんなはひとつの目的のために…One for All, All for One これもまた（通用するのは日本だけといわれるが）ラグビーにおいて尊重される精神のひとつである。こうした選ばれた下の授業概要こそ、「2019へのスクラム」とはいったいどういう授業であるかを受講者の目線より表しているといえるだろう。

ラグビーって4年前にすごく盛り上がったけど、グローバル以外結局よくわからなかった。そのような人のための授業である。南アフリカに勝利したことで今世界が日本に対して注目するスポーツ、ラグビーのワールドカップが今年、日本で開催される。ワールドカップをより楽しみ、他国の人々と交流できるよう、受講生全員で楽しく、体験などを交え、ルールやプレー、そしてラグビー文化などを体験者も初心者もみんなで学び合います。

（筑波大学『開設授業科目一覧』より）

授業がスタートした2013年を挟むように、大学ラグビー2012年と2014年のシーズン、筑波大学は大学選手権で久々に決勝に進んだ。後

に日本代表として活躍する福岡堅樹選手の在籍期間（2012～15）で、帝京大学の連覇を阻む金星を上げることはできなかったが、本学ラグビー部の活躍による盛り上がりは、「2019 へのスクラム」に豊富な話題と強力な弾みを与えてくれた。

大学の広報戦略にスポーツを巧みに活用する帝京大学は、ユニバーシティカラーの赤色 T シャツを大量に観客に配り（もちろん無料）、スタジアムを真っ赤に染め上げる熱の入れようである。テレビによく映るセンターラインをはさんで片側一方のスタンドの指定席をほぼ買い占め、動員したとみられる人員を座らせるとテレビ画面もほぼ赤で占領される。いっぽうの筑波ブルーはまばらである。

新しくなった国立競技場で筑波大学ラグビー部が大学選手権を戦う日はいずれまた訪れるだろう。「2019 へのスクラム」の受講生たちが家族や仲間を連れて国立で再会し、アフター・マッチ・ファンクションを盛大に行うのがお互いの夢である。ラグビー部のおかげで盛大な同窓会が毎年、しかも新年早々にできるというわけである。この輪を大きくするためにも、「2019 へのスクラム」はパワー強化を図り、国立の舞台に立てようラグビー部（竹村雅裕部長）を押し続ける。新年と優勝を共に祝える日が来るよう祈りながら、2020 年度から名称を「ラグビー精神と文化」へ変更するが、授業を支える思いと夢に変わりはない。